

といへり。

〔日本山海名物圖繪三〕豊後河太郎

形五六歳の小兒のごとく、遍身に毛ありて猿に似て眼するどし、常に濱邊へ出て相撲を取也、人を恐るゝことなし、され共間ぢかくよれば水中に飛入也、時としては人にとりつきて、水中へ引入て其人を殺す事あり、河太郎と相撲を取たる人は、たとへ勝ても正氣を失ひ、大病をうくと云、まきみの抹香水にてのましむれば、正氣に成と也、河太郎、豊後國に多し、其外九州の中所々に有、關東に多し、關東にては河童かわわらひと云也。

〔水虎考略後編〕釜淵川猿

毛利大江の元就の士荒源三郎元重は、藝州高田郡吉田に住す、天文三年八月、吉田の釜が淵より化生のものいで候、近邊の男女わらんべを捕て淵へかけいり、民家商家門を閉て、吉田郡は城下往來絶たり、元就是を聞たまひ、荒源三郎に下知し給ふ、源三郎は本名井上にて、信濃源氏の末裔也、其形容七尺に餘り、力量凡七拾人力あり、神力魔法を行はゞ、大蛇にても鬼神にてもたまるまじと、萬民雲霧のごとく集り、見物の貴賤市をなす、時に源三郎元重はだかになり、下帶に大太刀十文字にさし、淵の淺みにたち、大音に匂りけるは、いかに此淵の化生體に聞け、汝人民を取喰、其科によつて只今殺害の爲、荒源三郎來りたり、出て勝負をせよと呼りければ、淵の底とゞろき、逆波立て、水岸にあふれて流れ出て、元重の兩足を水中よりひしと捉て引込んとす、源三郎きつと見て、やさしやと足をとりたる兩手を握りて、ゑいと引、化生も下へひく、互に引合、おどり出しが、化生の力は百人力もあるべし、山のごとくにしてうごかずおもてを水中より差出したるをみれば、鬼にはあらず、淵猿なり、俗に云ふ川太郎くわに云ふ川太郎さればこそ頭くぼき處ありて、水あれば力つよく、水なければ力なしと兼々聞およびければ、頭を捉へんとすれば、忽すべりてとられずして揉合